

3. 炭焼窯について

炭焼窯の検出状態は、図IV-1のとおりである。土層断面図によると、天井崩落後、未だ凹地であったとき礫が投げ込まれたことがわかる。その後も圃場整備工事によると考えられる埋め戻し（3層）まで、凹地であったとみられる。この窯の焚き口の外側からガラス瓶が1点出土しているが、あいにくこの焚き口の外側は急傾斜をなしており、検出状態からは、窯に直接関係する遺物なのかどうかを明らかにできなかった。本文でも触れたように（31ページ）この『シトロン』瓶の製造は1909年（明治42年）以降である。

ところで、昭和の初めに入植し、今回道路予定地になるまでこの炭焼窯付近の土地を耕作していた近藤長一氏は、炭焼窯の存在を承知していなかった。調査中にうかがった近藤氏の話は以下のようなものであった。

「もともと粘土の畑でたいへんやせたところでした。昭和43年からの道営圃場整備のとき、焼けたあく（灰）が出るところがありました。ここらは、先住民族が住んだあとだと聞いておりましたので、その住居のあとなのだろうと思いました。」

それでは、この炭焼窯はいつ作られたのであろうか。

時期推定の手掛かりとなる伝承が得られているので紹介しておきたい。内園地区在住の宮田正雄氏によるものである。

「私が父から聞いた話です。私の父梅治は、明治29年（1896年）7歳のとき香川県からその父（雪治）に連れられて、この内園に来ています。昭和42年に82歳でなくなりました。炭窯のことは、今の国道12号、以前上川道路と呼んでおりましたが、これを作るとき、作業をおこなった樺戸監獄の囚人が焼いたものだと云うことです。私は昭和2年の生れですから、話には聞いていたが、窯跡をみたことはなかった。遺跡の近くの片山さん（一家は大正2年入植）や近藤さん、村中さんが知らなかったのは、入植が遅いですから、そうかも知れませんね。」

また、炭焼窯の時期推定に可能性をもたらす、調査区内の切株の年輪数の観察記録もある。道路予定地になるまで沢地区に落葉広葉樹が繁茂していたことはII-1（12ページ）に記したとおりである。調査に取りかかったとき沢のなかや斜面は、ヤチダモ、ハルニレなどの大きな切株が残っていた（図版IIIの6）。これらは前年夏（1986年）に伐採したもので、そのうち年輪数の最も多いものはM-77区斜面の黄櫟（キハダ）の、約85である（図版Iの4下）。ヤチダモ、ハルニレなどは55程度のものが多かった。

空知地方では、開拓の初期にあっては冬の作業として炭焼きを行なった話はよく聞くところである。今回検出したものが伝承の残る上川道路開削に関連するものに該当すると考えられるならば、時期を限定しうる開拓初期の遺構といえよう。

上川道路の工事が行なわれた時期は、以下のとおりである。

1886年（明治19）市来知～忠別太間上川仮道開削開始。1887年（明治20）改修工事始まる。

1889年（明治22）11月空知太～忠別太間の上川道路竣工。

（西田 茂）